非行型青少年の居場所を考える

青少年自立サポート団体「富田ふれ愛義塾」（大阪府高槻市）の活動報告から

畠山慎二

要 約 非行型の青少年の「居場所」的な活動を展開している、高槻富田ふれ愛義塾の設立の経緯、その活動の現状と課題についての代表者による報告である。代表自身の生い立ち、これまでに出会ってきた子どもたちのこと、ふれ愛義塾の具体的な活動の中身と課題等が報告されている。そのなかで、「子ども目線」でこうした子どもたちに寄り添うことの大切さ、こうした子どもたちを地域で支えていくことの重要性が指摘されている。

1 富田ふれ愛義塾ができるまで—私の生い立ち

私は高槻市富田（とんだ）町に生まれた。富田は被差別部落であり、両親は部落解放運動に関わっていて、幼少時代はふたりとも忙しくあまり家にはいなかった。それで、身内のところによく預けられていた。預けられた場所でご飯を食べて、風呂に入った頃に親が帰ってくるという生活だった。しかし、言うことを聞かない子どもだったので「あいつは勘弁してくれ」と言う身内の人もいた。家にいるときは、８歳上に姉がいるので、その姉が半分親代わりになってくれていた。この姉が、私に影響を与えている。親代わりになって愛情も注いでくれたが、私がやんちゃだったので、きょうだいゲンカも激しかった。親も忙しかったが、愛情を注いでくれたし、旅行などにも連れて行ってくれた。そのように家族は私に温かい愛情を注いでくれていた。

しかし、小学校に入ると授業中、席に座れなかった。１年生はなんとかついていけたが、２年生ぐらいになるとだんだんとついていけなくなった。親は「宿題をやれ」とうるさいので、２階の自分の部屋に行って15～20分じーっとするか音楽を聞いて、「やった」と嘘をついていた。そういうことをしていたら、どんどんどんどんと遅れていった。小学校の３年生と５年生のときに学級崩壊を経験したが、その中心人物が私だった。今から思うと本当にばかだったと思うし、悪いことをしたと思っている。グローブとボールを持ってきて、授業中に後ろで壁に当てたりしていた。授業にも出なかったり、抜け出したり、教師に暴言をはいたりして、授業は成り立たなかった。そうしたなかで、このままではダメだということで小学校６年生のときに２クラスが４クラスになって、１クラス15人となった。私を中心にやんちゃな子どもが多くいたので、１クラス２～３人にしないと授業が成り立たない状態にまでなっていた。中学校に向けて５年、６年は同じクラスでいくということはよくあると思うが、６年生に上がるときにクラスを全部入れ替えて、担任もすべてベテランがついた。６年生のときには、勉強はほとんどついていけなくて、ローマ字は書けなかったし、九九もギリギリわかっていた程度で、今でも分数はあやしい。

中学校に入っても、授業には出たり出なかったりで勉強にはついていけなかった。当時の中学校の教師に聞くと、本当かどうかはわからな

いが「中２の３学期までお前はノートも教科書も開いたことなかった」と言われた。中学校では３年間同じ担任で、その教師との出会いがすごく大きい。体でぶつかってくるような教師で、毎日のように呼び出されて話をしていたが、必ず最後に「おれはお前を信じる」と言われた。しかし、毎回「授業出る」とか「ノート書く」とか約束しても、１時間後とか次の日にはそれを私は破ってしまっていた。それでも「おれはお前を信じる」と言ってくれていた。

その言葉がだんだんと効いていった。そのときは、よくわからなかったが、この人（教師）は何か違うな、という感じはあった。それでも裏切り続けていたが、その教師はずっと変わらずに関わり続けてくれていた。家にもしょっちゅう来てくれて、自分だけだと居留守を使うので、親が帰ってくる夜の９時、10時に合わせて家庭訪問してくれたりしていた。私の気持ちも変わってきて、「この人だけは信用できる」と思いはじめた。その教師が、私が中２になったときに、親や他の教師と話をして、「今のこいつに何を言っても、絶対、授業には目は向かん。何かこいつにやりがいとか、自分の居場所をつくらないと、こいつは絶対良い方向には向かへん」ということになって、いろいろな人とのつながりとか、居場所をつくることで自信をつけさせることが先決だということになった。それで、演劇や朝鮮の太鼓チャングの演奏等に連れて行ってくれた。これが今の自分の、富田ふれ愛義塾の原点だと思う。そのときに出会ったのが、和太鼓だった。和太鼓を見た瞬間に「先生、おれはこれをやる」と言って、始めた。その週２～３回の和太鼓の練習にも初めのうちは教師が付き添ってくれた。

今までは教師や地域の人たちに敬語を使うことなど一切なかったが、その和太鼓の活動を通して敬語も覚えていった。いくら練習しても、どれだけ技術が上達しても、人間として当たり前のあいさつやモラルを身につけないと認めてもらえないということを、子どもなりに身をもって初めて教えてもらった。今までは、大人から話しかけてくれる、あいさつしてくれるのが当たり前だった。自分の技術を高めてそれを人に示すときに必要な社会のルールを、そこで教えてもらった。また、舞台に立って太鼓を演奏すると拍手をもらったり、「すごい」とほめられたりする。これまでは、怒られることばかりで、そうしたほめられる・認められる経験がなかったので、そのときの感動は今でも覚えている。そうしたことを通して、意識も変わっていった。それまでは、やんちゃのリーダー格ということで、「おれは高校なんか行かへんで」と自分の本心でもないことを言って虚勢を張っていた。しかし、太鼓を始めたことで、ありままの自分でいることのできる場所ができ、虚勢を張らずに自分の弱みを見せることができるようになっていった。そのため、クラスでも「おれもみんなと一緒に高校行きたいねん」とか、教師にも「高校行かしてぇやぁ」とはっきり言えるようになった。

そのようななか、太鼓に関わっている大人から「畠山くん、高槻四中校区っていうことは知ってるけど、どこに住んでんの？」と何気なく聞かれたことがあったが、そのときに、私は鳥肌が立って一瞬固まってしまった。自分が部落に住んでいること、いとこが結婚差別をされたこと等、さまざまな記憶が一気に頭のなかを駆け巡って、これは言えないと思い、嘘をついた。本当のことを言ってしまったら、それで差別されて、せっかくできた自分の唯一の居場所がつぶれてしまうのではと思ってしまったのである。今から考えると、その人たちは部落のことについてもある程度理解していたし、教師もたぶん話してくれていたので、たとえ話したとし

てもそういうことは絶対になかったと思うが、そのときは嘘をついてしまった。帰る途中で悔しくて涙が出てきて、そのときに初めて自分自身を考えるようになりはじめた。

それまでは、自分が勉強できないのは部落に生まれたからだと、すべてを部落のせいにしてきた。しかし、そうした経験を経て、こんな自分では、親のことや地域のことを胸張って言えない、誰も自分のことをわかってくれない、それがすごく悔しいと思うようになった。それでも、すぐにやんちゃをやめたということではなく、少しずつ自分と向き合えるようになっていった。

それで高校に行って、地域に深く関わっていた大阪大学の院生の影響で本を読みだしたり、その人の話をいろいろ聞いたりして、少しずつまじめになっていった。そのときに、小学校高学年～中学生ぐらいの子どもたち―今の20歳前後―が、私のところに来て、「武勇伝」を聞かせてくれとせがんできた。後輩に第二、第三の自分がいっぱいいると感じ、これではだめだ、なんとかしなければならないと感じた。私自身は、中学校の教師や阪大の院生など、いろいろな大人との出会いのなかで、さまざまな影響を受けて、その人たちが道をつくってくれて、自分と向き合えるようになった。そして20歳前後になって、その当時の中学生、高校生と関わるようになって、次は自分が後輩たちに返していこうと思いはじめた。一緒にご飯を食べたり、キャンプに行ったりした。

その当時、14～15歳のやんちゃグループ５人ぐらいがいた。学校には毎日遅れていくし、授業には出ない。夜は遅くまで遊んでいた。その子たちにずっと関わっていて、とりあえず初めめに「お前ら、テストは絶対遅れんと行け。わからんかってもいいから出ろ」という話をして、全員に行くということを約束させた。しかし、そのグループのボス格の子がテストに行っていなかったということを次の日に聞いた。それで私はぶち切れて、その子を呼び出して、「お前、何しとるんじゃ、あれだけ約束して。他の４人は行ったんやろ？　いい加減にせえよ」とかなり厳しく怒ってしまった。すると、その子は走って突然帰ってしまった。そのときに「おかしいな？　これは話をせなあかんな」と感じて、追いかけていった。話をしたら、その子の家は母親も父親もおらず、実質的に祖母と姉の３人暮らしで、家庭の収入がないため祖母の内職の手伝いを朝方までしていて、テストの日に寝坊したという事情があったということだった。それを聞いたときに、私は自分をあほかと思った。それまでの自分は、「おれは元ワルやけどまじめになったから、おれの言うことを聞け」「お前らと同じことしてたから、お前らの気持ちわかるから、おれについてこい」と上からものを言う感じだった。そうではなくて、子どもたちの行動の裏にあるもの、なぜその子らがそうなってしまったのかということを見ていなかった。そのことを、その子どもたち自身から教えてもらった。タバコを吸っている子どもに「やめろ」と言っても、やめない。それと同じで、悪いことをしている子に「悪いことするな」と言っても、効き目はないだろう。なぜその子が、そうした悪いことをするようになったのか、という過程を見る必要があるということを、その出来事から学び、それが今の自分にとっても大きな経験となっている。

そのボスの子が、ある日、「おれらダンスするわ」と言いだした。初めて子どもたち自身からやりたいことを言ってきてくれたので、「お前ら、やってみろ」と言った。高槻はけっこうダンスが盛んで、ガラス張りの市役所にダンスの練習をする高校生などが集まってくる。そこに、その子たちも行って、誰かに教えてもらう

必要があるから敬語を覚えたし、イベントに入れてもらうときも、タバコをくわえながらだと誰も相手にしてくれないので、自分たちなりのルール―市役所のまわりでは一切タバコを吸わない―を決めて、それを身につけていった。私は一緒にダンスはできないので、マネジメント的な役割で、地域の夏祭りや福祉施設の催しに出演できるように交渉したりと、そうしたサポートをした。そんななかで、この子たちが地域で有名になっていって、それまで避けていた同級生たちが、逆に「同じ学校やねん」「同じ団地に住んでるねん」と自慢するようになり、その子たちに対する態度も変わっていった。

2 ふれ愛義塾の活動

この子どもたちとの関わりが始まりで、その子たちが私の活動に参加したり、自分らの友だちやダンス仲間、やんちゃ仲間を連れてきた。「慎二くん、こいつもちょっと家でいろいろあって今悩んでるから、ちょっと話聞いたって」というふうに。そうしたなかで、自分の地域や自分のまわりの子だけではなく、もっといろいろな人と協力してより幅広い青少年の支援ができればいいなと思って、大学教員や田川ふれ愛義塾に助言をいただき、2008年に富田ふれ愛義塾を設立した。設立といっても、田川ふれ愛義塾のように子どもたちが寝泊まりできる部屋を持っているわけではない。まずは「一緒にご飯を食べよう」ということで、自分の家に子どもたちを呼んで一緒に夕食を食べている。週に平均したら、２～３回は子どもが来ている。その他の活動としては、山登りがある。山登りは達成感をみんなで味わえるし、スポーツと一緒で遅い子もいれば早い子もいて、人生になぞらえることができるので、こだわっている活動である。地域や福祉施設の祭りで出店・出演することにも重点を置いている。祭りに出店・出演することで、人との関わりや、あいさつをするということを身をもって経験できる。また、地域の人にも活動を認めてもらえる機会でもある。その他には、毎年夏に恒例で琵琶湖に行ったり、半年に一回ある地域の清掃活動に参加したりしている。また、私が地元で部落解放同盟の役員を務めているので、同盟と富田ふれ愛義塾の合同で、人権の「芽」を育てようというイベントを毎年春に開催している。そこで子どもたちのダンスや歌の発表の場を設けたり、ゲストを呼んで人権に関する講演をしてもらったりしている。

去年の中学３年生はとても学力が低かったので、学校の元教師、地域の人や大学生に手伝ってもらって、１年間ずっと勉強会をおこなった。学力的にしんどい子ばかりで、小学校や中１のドリルから始めた。中３の子が５人来ていたが、１人はそこそこできたが、あとの４人は学力的に厳しく、５教科平均が最低で11点、最高で30点という状態だった。そういう子どもたちは勉強に対する自信が全くないので、達成感や自信を少しでもつけて、まずは高校に行って、そして高校を辞めないようにということで去年１年間勉強会を開いていた。そうした子どもたちの実態があったから、勉強会を開催している。「やるから来い」ではなく、子どもたちの実態があるからやるというのが、私たちの活動のスタイルである。

勉強会に来ていた子どもたちは、「勉強したい」とか「このままやと高校（卒業が）ヤバい」とかそういう気持ちで来ていたと思う。また、ふれ愛義塾のメンバーもスタッフとして来ていたので、メンバーのみんなに会えるから来ていたということもある。勉強会は夜の７時から９時まで２時間やっていたが、勉強自体は実質１時間ぐらいしかせず、あとはしゃべったりして

いた。問題集・ドリルを半ページくらいやったら、「もう休憩やろ？」と言って、半分以上休憩になってしまっていたが、家にいたらまったくしない子が勉強会に来て１時間勉強したら、それはそれで成果と考えていた。

富田ふれ愛義塾への参加は、登録制という形ではない。親から頼まれた子と地元の部落の子で、半々ぐらいである。親とやりとりする必要がある子に関しては、親と話し合いをしている。しかし本人に登録をさせるということは、敷居が高くなるのでしていない。

スタッフといえるのは実質的に、私と妻のふたりである。その他のメンバーも加わって、ふれ愛義塾に来ている子どもに関してケース会議を開いたりしている。スタッフメンバーは、みんながそれぞれ仕事をしているので、私の自宅で開いているふれ愛義塾に常時誰かがいるというわけではない。スタッフのなかには昔やんちゃをしていた子もいて、その子を副代表にして次の代の子たちの面倒をみていけと言っている。運営資金については、一般の助成金をいくらかもらっているが、半分は実費で出しており、財政的には厳しい。講演に呼んでもらってその謝礼を活動資金にまわしたりしてなんとかやっているが、今後、資金をどのようにしていくか検討している。

ふれ愛義塾の活動をしていて、夜に子どもたちが出入りすることに関して、まわりから「あんたの子ども小っさいのに、そんなことして大丈夫？」というようなことを言われて悩んだ時期もあったが、他のNPOで活動している人に「そうした環境が子どもにとってもええんちゃうん？」と言われたし、私自身も意識して自分の子どもたちに話をしている。ふれ愛義塾のメンバーは子どもたちをかわいがってくれているし、そうした関係性が次の世代にどんどんつながっていくと思う。私の息子も娘もそういう関わりを経験していたら、自分もそうありたいと思うだろうし、親としての良い教育になっていると感じる。夫婦ゲンカは絶えないが、ふれ愛義塾の子どもに関する会話が常にあり、夫婦の会話は他の家庭に比べれば多いと思う。そういう意味では、この活動を通して、私の家族の輪もしっかりできていっている。

また、ふれ愛義塾の活動を始めて、地域全体で考えたら変化はかなりあった。富田はコミュニティビジネスの会社を立ち上げようとしており、私も役員として入っているが、そこがふれ愛義塾を支援することを打ち出してくれるようになった。イベントのときなどには、地域の人が「あんたらがんばりや」ということでご飯を作ってくれたり、「これでご飯食べ」とお金を渡してくれたりする。また、勉強会のときに教師や地域の人が協力してくれる。そういう意味では、ポイント、ポイントでの協力者は増えてきている。地域や社会でふれ愛義塾のような場所が必要だということを理解してくれ、広めたりしてくれている。

最近では、自分の子どもが２歳と４歳ということもあり、それぐらいの年代の子どもたちを集めた活動も始めている。やはり幼い頃から子どもたちに関わっていく重要性を感じるし、子どもを地域の人と関わらせていくことが、今後の地域を良くしていくことにもつながっていくと思う。強いて言えば、そうした関係性が今後の非行防止にもつながっていくだろう。そうしたことを意識して、同年代の親と話し合って、子どもたちとも関係をつくっていこうということで、一緒に花火をしたり、ご飯を食べたり、バーベキューをしたりしている。そこに、ふれ愛義塾に来ている少年、青年のメンバーも参加している。

3 富田ふれ愛義塾の子どもたち

ふれ愛義塾では来る子は拒まないので、非行系の子が多いが、普通に学校に行っているようなまじめな子も私の家に来ている。そのような子どもの親が、「あそこに行ったら、あんたも非行してると間違われるから行くな」と言ったということもあった。そのような子は、非行行為をするわけではないが、居場所がないとか悩みがあるとかという理由でふれ愛義塾に来ている。また、非行グループには入っていないが、そのなかの誰かと友だちということで一緒に来る子どももいる。その他にも、私の話を聞いたりブログを見たりしたことがきっかけで入ってくる子や、NPOの紹介で保護者から連絡がきて入る子もいる。地域の子についてはだいたい情報をつかんでいるので、つながりをつくっていきたい子たちが来たりもしている。

子どもへの初期対応は、子どもによって異なる。いきなり家に呼ぶ子もいれば、私と２人で何回か会ってからとか、妻あるいは役員スタッフの誰かと私と３人で会ってから、家に呼んだり活動に参加させたりというパターンもある。子どもがひとりで来たとしても、初めて来た子にはみんながしゃべりかけてくれるので、すぐに仲良くなる。

子どもたちは毎日は来ないが、週の半分ぐらい各日２～３人が来ている。しんどくなったり何か抱え込んでいたりするような子は、ひとりでやって来る。人間関係や学校生活がスムーズにいっている子どもは、逆に、来る回数が少なくなる。ふれ愛義塾のメンバーだという感覚を持っている子は、半分くらいだろう。ただ来ているだけとか、言われたから来ているという子もいる。私たちがつかんでおきたいけれども来ていない地域の子もまだまだいるし、なかなか関係が持てていない子もいる。

ふれ愛義塾に来る子どものタイプはばらばらであるが、７～８割は家庭に原因がある。それは虐待だけではなく、親との関わりであったり、家庭環境の影響である。あとは、スポーツで挫折した子どももいくらかいる。

これまで関わってきた子どもたちで印象的な事例をいくつか紹介したい。

当時中学校２年生で頻繁に家に来る女の子がいた。いつも家に来ると、私の妻に「ジュース入れて」となれなれしく言う子で、一見どこにでもいるような子だった。しかし帰り際になると、いつもようすがおかしくなっていた。帰る時間に近づくにつれて、表情が暗くなり、ぼそぼそ声になっていく。「なんかおかしいな」と思ってようすを見ていたが、どうにもならないということで、私と妻とで呼び出して話してみたら、ペットボトルで殴られるとか、夜中にお酒を買いに行かされるとか、母親から虐待を受けているということがわかった。教師たちに入ってもらったり、親とも話し合ったりして対処して、まるく収まった。やはり関わるなかでわかっていくこともあると思う。家にしょっちゅう来て顔を見たりしていたからそういうことがわかったが、ただそこら辺ですれ違うだけの子どもだったら、そうしたことに気づくことはできなかっただろう。

別の子の場合は、「沈黙の虐待」とでも言うべき家庭環境であった。その子の家庭は、両親が別居状態になっていた。しかし親の都合で、そのことを教師や友だちに言うことができなかった。その子は、両親のことも理解しながら、教師や友だちには嘘を言い続けていて、すごくしんどくなっていった。嘘に嘘を重ねていって、結局、人間関係をシャットアウトしていくようになって、放課後や土日でも友だちとほとんど遊ばないということになり、唯一来るのが私の家であった。その子も今は落ち着きを取り戻し、

親のことは憎んでいるが、大人の世界だから放っておこうというふうに開き直れるようになった。その子が、「自分がいれる富田ふれ愛義塾というところがなかったら、自分はつぶれていた」ということを言ってくれたことがある。その子には、家庭にも学校にも居場所がなかったということだろう。

もうひとり、少年院から出てきた子に関わったケースを紹介する。この子は、少年院に入る少し前から、保護者からの相談で関わってきた経緯があった。その子はずっと野球をしていて、中学校に入っても野球をまじめに続けていた。ある日、体調が悪くて顧問の教師に「今日は体調が悪いから練習を休ませてください」と言ったら、「お前、何ぬかしとるんじゃ、それやったら辞めてしまえ」と突き放されてしまった。それでも、高熱で、無理やり練習に出られるような状態ではなかったので、その日は帰った。そうして、次の日に行くと、教師がまったく相手にしてくれない。それで、教師、大人が信用できなくなってしまい、野球をやめてどんどん荒れだしていった。

また、その子は「今まで誰にも言えんかってんけど」と言って、小さい頃に自分が虐待を受けていたことを話してくれた。親に鉛筆で刺されてその芯がまだ身体に残っていたり、すぐ叩かれたりしていて、だから野球が唯一の心の拠り所であった。それなのに、教師に裏切られたという気持ちがつのって、爆発してしまい、誰も信用できないという状態になってしまった。その子も今はまじめに働いて、私たちの活動にも参加してくれている。

その子は、親に対する「恐怖」への防衛手段として、高校生になっても親を殴っていた。「親を殴ることはやめろ」と言ったが、「親に手を出したらあかんっていうことはわかってるけど、殴ることで親がおとなしくなって。昔のこと（虐待）が恐怖なんですよ」と言ってきた。それで、私が親と会って「お子さんがこういうことを言っているので謝ってほしい」と話して、親は少年院の面会のやりとりや手紙で虐待のことについては謝った。その子は、少年院を出てからはころっと変わり、就職もして今は落ち着いて親と一緒に暮らしている。

もうひとつ、私が腹の立った出来事があった。２～３年前に、まったく知らない４人ぐらいの子たちが、近所の公園でたむろしていた。「どこのやつらやろうな」と思って、仕事の帰りに公園の前を通ったときに見ていた。しばらくすると、公園の掲示板に「公園内での未成年の喫煙・飲酒は禁じます。ゴミの放置は一切禁じます。見つけたら警察にすぐ通報します」という注意書きが、自治会の名前で貼り出してあった。それを見た瞬間に、「こいつらはあほか」「お前ら一回でも注意したんか」と思って腹が立った。これでは、自分の目の前のことだけ考えているだけで、社会的には何も解決していない。この公園からその子どもたちを追い出しても、その子たちは別の公園に行くだけである。その後、私が「お前ら最近ようおんなぁ。寒ないか？」と話しかけて名刺を渡すと、「（名刺もらって）いいんですかぁ？」と言うような素直なよい子たちばかりで、「なんかやりたいことないんか？」と尋ねると「バンドやりたいと思って、練習を始めようと思ってるんですよ」と答えた。それで「お前ら、あの掲示板見たろ？絶対頑張れよ。おれがここの自治会の祭りにお前らを出すからな」と言った。また、ゴミが散乱していたので―おそらく半分以上はその子たちが出したもの―「おれの子どももこの公園でよう遊ぶけど、子どもは何でもすぐに口に入れるんで、ゴミ出すのはやめてや。頼むで」と言ったら、次の日からゴミはなくなった。まだ練習を始めたばかりで実現はしていないが、その子たちを

その自治会の祭りに出すことが私の夢のひとつである。

こうした子どもたちに関わってきて、やはり親の影響や家庭環境、教師やまわりの大人との関係のなかで、悪い方向に走っていってしまう子が大半であるということを実感する。誰も信用することができないとか、自分の居場所がないという子どもたちがほとんどである。そうした子どもたちを頭ごなしに怒って対立姿勢になれば、子どものほうも構えてしまう。例えば、高校生に「お前ら、こんな時間に何しとんねん？」と言うのと、「お前ら、寒いけど、こんな時間までこんなとこいて、ご飯食べたんか？帰らんでええんか？」と言うのでは、全然違う。大人にどういう目で見られるのかということを、子どもたちは感じている。特に非行に走ってしまう子どもたちは、人間不信であったり、大人との関係が不安定であったりする子が多いので、相手の見方や、どの目線に立っているのかということについて敏感である。そこは、大人が目線を下げることが大事であると思う。

また、子どもとの関わりでは、とりあえず聞くことが大切だと思う。例えば、家出をしたという子どもに面と向かったときでも、なぜ家出をしたのか、子どもの話をまず聞くようにしている。悪いことは悪いと伝えなければならないが、その子が９割悪いとしても、１割ぐらいは言い分があると思う。その９割悪い部分はしっかりと怒って、１割の部分に共感することが重要である。人間関係で10対０でどちらかが一方的に悪いということはないだろう。矯正施設から来る子は、今まで関わったなかでは３人である。何かあったら電話をかけてきたり家にやって来たり、「電話してきて」とメールをしてきたりする。子どもたちがメッセージのサインを出してくるので、私たちがアンテナを張ってそれを察知することが大事である。

子どもとの関係で、「もう会いたくない」といったように、完全に断絶してしまったことは今のところない。まだまだそんなに多くの子どもに関わってきたわけではないので、これからうまくいかないケースも出てくると思う。もちろんふれ愛義塾だけで全部できるわけではないので、いろいろなところと連携をしている。ふれ愛義塾より、別の場所・機関のほうが合っているということもあるので、連携はしっかりしていきたい。親のなかには、私たちの活動を認めてくれて「あそこなら安心」ということで理解をしてくれる親も多くいるが、自分の家庭を見られたくないから「あそこには行くな」と親が言って、無理やり私たちと子どもを離して、完全に切れてしまうケースも何回かあった。もちろん保護者とも話はするが、活動の前提としては、子ども本人をどうカバーしていくかということを念頭においている。家庭がなかなか変わらないということも現実としてはある。

それでも、子どもたちは、家のことを話したり親のことを悪く言うことはしたくないと思っている。しかし、信頼関係をつくれば、そうしたことも言ってくれるようになる。私たち大人と話すことで、子どもたちのはけ口にはなっていると感じる。ひとりでもそういうことを言える相手がいれば、子どももだいぶ楽になる。そうした精神的な部分は、私たちの活動でカバーしていける部分だと思う。

ふれ愛義塾に来ている子どもたちは、就職等の際の選択肢が少ない。仕事といえば、肉体労働やトラックの運転手であり、自分がスーツを着てパソコンを打つということは初めからイメージにない。そして、目の前のことしか見えていない。私と同じ部落の男の同級生は、半数が高校を途中で辞めている。目の前のことしか見えていないから、高校入学がゴールになってしまって、高校に入っても勉強せずについてい

けないということである。目標ややりがいがなければ、学校も続かないし、勉強に意味も見出せないだろう。

また、就職難で就職口がそもそもないうえに、子どもたちに見極める力がないことが課題となっている。友だちに「おれ働いてるところ、空いてるで。おいで」と言われたら、何も考えずに行ってしまう。すると、健康保険証もない、源泉徴収もないというような請負系の仕事だったりする。本人は正社員のつもりで働いていて、半分だまされているようなものだ。ネイルアートの店に行っている子の話では、歩合制で朝9時から夜10時まで拘束されるという、労働基準法を違反したような仕事もある。そうした仕事の善し悪しが見極められず、だまされつづける子どもが多い。制度について知らないし、自分が辞めたら迷惑がかかると思って続けている子もいる。

ふれ愛義塾に来たからといって、必ずしもうまくいくとはかぎらない。親子関係の問題で家出を繰り返したというケースがいくつかある。一方で、ふれ愛義塾に来ることで、人間関係が良くなっていく子どももいる。今までは人間関係をすべてシャットアウトしていた子が、友だち関係を広げていくということもあった。

4 ふれ愛義塾の今後

私の過去の経験がふれ愛義塾の活動に活かされている部分はあるが、この活動は「やってあげる」というものではなく、一緒に祭りに出店・出演したり、一緒に違うことを生み出していくことはおもしろいと思ってやっている。私は支援者としてだけではなくて、一緒につくっていくという立場でやっている。そこは、他の組織・団体とは違う部分だと思う。私に対して敬語で接する子もいるが、9割の子はため口である。こうした子どもへの接し方、雰囲気は他のスタッフにも、明文化はされていないが共有されている。あまり上下関係がきつくなると、来ている子どもがしんどくなってしまうかもしれないので、こうした関係でいる。しかし、こちらの方が上だということを見せなければ言うことを聞かない子もいるので、ケースバイケースで子どもには対応している。

また、子どもたちに「夢を持て」とは一切言わない。私たちが考えている夢はもっと小さいもので、例えばダンスの大会に出たいとか、海外に留学したいとか、そういう身近なことである。私たちの考えている夢づくりというのは、無理やり夢をつくらせてそこに導くのではなくて、夢づくりのサポートをしていくということである。例えば、どんな留学のしかたがあるのかをインターネットで一緒に調べるという支援の仕方である。親だと、例えば子どもが留学したいと言ったら、「あんたそんなお金どこにあんの？」「英語いっこもしゃべられへんのに」と否定してしまうことがある。そうではなくて、いろいろ調べてみて視野を広げて「お金貯めなあかんねんな」「英語力が必要なんやな」ということを子どもが知っていくことが大事であると、親とも話し合っている。親や大人は「何か見つけろ、見つけろ」と言うくせに、いざ子どもがやりたいと言ったらすぐ頭ごなしにふたをしてしまう。そこを私たちがなんとか広げていきたいと思っている。それで本人が諦めたらそれでいい。そういうやり方で、私たちの活動はやっている。

ふれ愛義塾の今の活動は、私の家を開放したり、単発的なイベントをおこなうといった内容が主である。昼間は、私は仕事をしているし、妻も仕事をしているので、ふれ愛義塾の活動はできない。理想を言えば、昼間も活動ができる常設の場所をつくりたい。子どもたちには、私

以外のいろいろな大人とも関係をつくって、いろいろな意見にふれてほしい。そうしたこともあって、私たちとしては、もっと地域の人と関係をつくっていきたい。そうした関係があれば、例えば、保育士になりたいという子がいれば、地域の保育所の保育士さんにつなげて話を聞かせることができる。そのような関係性が理想だと思う。裏を返せば、地域がいろいろな子どもの意見を吸収できるしくみになっているということだろう。ふれ愛義塾は、いろいろな大人と子どもをつなげていくパイプ役のような組織を目指したい。そういう意味でも大人とのつながり、地域のつながりを大事にしていって、いろいろな情報をすぐキャッチできるような組織でありたい。人と関わることで、社会にどんどん出ていくことができる。私もそうだったが、狭い地域のなかにいると、敬語も使わないしあいさつもろくに覚えないし、ひとりで電車に乗るという経験がないこともある。活動を通して、活動の目的とは別に、そうした経験を積み重ねていくことで視野が広がっていき、変わっていくということもある。

もちろん学校とも話はできるようにはしているが、いろいろな事情で、それほど連携がとれていない状況である。ふれ愛義塾に来ている子どもについて、私たちの方が情報を持っている部分もあるし、私たちも子どもたちの学校でのようすを知りたいので、個人的に情報共有をはかっている。

また行政機関や各種団体が企画する事業で、非行や荒れている子どもを対象とした事業はほとんどない。ほとんどの機関が行政的になっていて、例えば連続何回という事業をしても、自分でサインして親のはんこをもらってくるよう求められることが多い。しかし、しんどい子はそういったことが苦手である。そうした子どもをカバーできるようなバックアップ体制をつくらないと、いくら良い事業をしても子どもたちは集まらないだろう。

ふれ愛義塾が地域の中心や核になってはダメだと思う。対等な関係ではあるが、やはり学校が中心になる必要がある。子どもたちにとっては、学校で過ごす時間が生活のなかで一番長いし、学校の教師といる時間が親といる時間の次に多い。そういう意味では、学校が核となって、故・池田寛氏（大阪大学）がおっしゃっていた「教育コミュニティ」をつくっていくことが理想だと思う。その「教育コミュニティ」のなかに、富田ふれ愛義塾や、いろいろな支援団体、NPOがあって協力していくという体制が理想的な形であろう。そのうえで、「しんどい子」に焦点を当てた事業をしっかりとしていく必要がある。行政の事業の場合、定員が決められて、その定員を満たさないと予算が出なくなることがよくあるが、それでは生活背景が厳しい子はもれていってしまう。そうではなくて、定員が満たされなくてもこの事業は絶対必要だから続けていくという視点を持ってほしい。また、行政機関や各種団体が事業をする場合、その案内を配布するだけではなくて、「この取り組みはあの子に合うな」と思ったら、各関係諸機関が話し合って、例えば学校の担任からその子どもに、あるいはその保護者に「こんな取り組みがあるが、行かないか」と働きかけるという連携をしていく必要がある。大人どうしのつながりのなかで、子どもたちをサポートしていくことができると思うし、とりわけしんどい子に手を差し伸べるということになるのではないか。